

パ ル テ ィ ア 帝 国 の 性 格

足 利 惇 氏

イラン古代史研究において、ペルシア帝国の出現として我々は Media 帝国の名称をまず知るのであるが、ハカーマニシュ Hazāmaniš (Achaemenes) 王朝のクールシュ Kūruš (Cyrus) 大帝以前の知識には概して神話的伝説の要素が多分に伏在している。云うまでもなくイラン文化の淵源についての近年行われて来た考古学的調査の結果は、これらの問題をも含めて漸次解明されつつあることは喜ばしい。而して、イランにおけるペルシア帝国史の系譜においてはイラン人の手で設立した三王朝、すなわち、ハカーマニシュ、アルシャク Aršak (Arsakes), サーサーン Sāsān (Sasan) の名を連らね、その間 Alexandros 大帝の帝国崩壊後の Seleukos 王朝のシリア帝国の支配を見るが、その領土はいわば Seleukos 1世の云う「槍にて捷ち得た領土」(δορικτηρα) に過ぎなかった。このうちハカーマニシュとサーサーン両王朝ともにパールス Pārs (Persis) を本拠としているのに対し、アルシャク王朝のみが東北イランを故地としていることは、この王朝による建国の性格があらゆる面において前二者と異っていることを予示している。

ところでイラン人の血脈尊重の理念は、イスラーム時代になっても、教祖マホメットの血族であるアリーを始祖とするシーア派を信奉していることから知られるが、政治的な王朝交替についても以上の理念の生きているのが見受けられる。クールシュ大帝の出生についての諸伝説のうち彼を Media 前王朝最後の王アステウアゲース (Astyagēs) の娘マンガネー (Mandanē) の子とする説、アルシャク王朝の諸王がハカーマニシュ王朝アルタクシャシャー Artaxšaça (Artaxerxes) 2世の後裔と自称していること、またサーサーン王朝の帝国創始者アルタクシェール Artaxšēr (Ardasir) は前王朝のアルタバーン Artabān (Artabanos) 王の娘(または従妹)あるいはアルタバーンの子の姪を娶ったという伝説などがあるが、Makedonia の Philippos の子 Alexandros にも特別な取扱いを見せて、ハカーマニシュ王朝の血脈相続者として解釈しているのである。すなわち、Šāhnāmah によればカイ王朝 (Kayāni) の Bahman と妃 Humāy との子

パルティア帝国の性格

Dārāb (Darius 2世) が父王に譲位を受けたので (この方法でカイ王朝なるものをハカーマニシュ王朝と結びつける手順はパフラヴィー語書一般に見られるところである), 兄弟のサーサーンはこれを不服として山中に隠棲してしまい (このサーサーンこそサーサーン王朝の祖と考えられている), その間, Dārāb は Rūm を征服しその王 Failaqūs (<Philippos) の娘 Nahīd を得たのち口臭を理由に父家に帰えしたが, それ以前に懐妊していた子が Iskandar, すなわち Alexandros に外ならずとし, Iskandar は長じて実父と同名の Dārāb に対してイラーン統治の相続権を主張し前王朝にかわってアルシャク王朝 (Aškāni) を開いたことになっている。ゾロアスター教徒にとって悪魔と見られた Alexandros にもイラーンの統治者としてその血脈的連関を認めようとする志向がうかがわれるが, これは統治に関するイラーンの国民的自尊心の少しも毀損されないことを示している。この大王をイラーンの正統的君主に列せしめようとする志向は, Pahlavī 語で改作せられたアレクサンドロス譚にもこれをうかがうことができる。Alexandros を凶神 Ahriman の権化と見做しているゾロアスター教伝統に対し, このことはハカーマニシュ王朝への国民的郷愁を物語るものと云える。

このような血脈尊重によってアルシャク王朝の諸王が自からアルタクシャシャー 2 世の後裔と称したり, あるいは Alexandros をイラーンの血脈に吸収し, かれをしてアルシャク王朝の祖とする取扱いきえ見せながらも, このアルシャク王朝はペルシアの政治的帝国の系譜外におかれる傾向があった。Šāhnāmah がそうであり, Pahlavī 語書 Kārnamak i Artaxšēr i Pāpakān もまた同様で, いずれもハカーマニシュ王朝をサーサーン王朝と直結しようとしているのである。すなわち, Šāhnāmah は Alexandros をイラーンの血脈に吸収したとはいえ, かれの如き人物をアルシャク王朝の祖とするのであり, Kārnamak も Artabān 5 世の名は挙げるが, イラーンの正統王朝としてのアルシャク王朝には少しも言及していないのである。こうしたことは Bundahišn にもうかがわれ, その一節ではアルシャク王朝に言及しながらも, イラーンの歴史を取扱う項ではハカーマニシュ王朝からサーサーン王朝に直続している有様である。その理由は, これが歴史的に歴然たるイラーン民族の王朝でありながら国民感情的には好ましからざる異質性の伏在していたことによるもので, 単なる後代の忘却とのみ解すべきではない。勿論, それにはアルシャク王朝につづくイラーン文化の最盛期であるサーサーン王朝時代の出現を強調さず文学的意図があることも否定できないが, それとともに Parthia 帝国の性格が古代イラーンの他の二大帝国に比較して如何なる点にその異質性を指摘し得るか検討する必要がある。

ハカーマニシュ王朝とサーサーン王朝とは、その国家形成において輝やかなしい文化的統一をなし遂げたのに対し、アルシャク王朝の国家内にはかかる統一の欠如していたことをまず認めねばならない。Parthia 帝国の出現当初にはいわばイラーン人とスキウタイ人との民族混成が主体となったが、これら中央アジアから連続して打寄せる民族移住の波は事実上文化的統一の起り難い有力な原因の一つであった。Parthia 帝国を生んだ民族はこれらの流民の比較的後代の一群であり、ギリシア史家の云う Dahai 族の後裔でその一種族である Parnoi (又は Aparnoi) であったと云う。クールシュ大帝の東方遠征の際自からの生命を断ったのはこの Dahai 族との戦中であった。B.C. 7世紀頃、Assyria の Asarhaddon 王に知られた Partukka, Partakka の名称や古代ペルシア碑文に記されている Parthava の語は、このイラーン東北方を指す地方名であり、Gaugamela の戦闘に参加した Parthyaioi にしても実はこの地方出身の戦士の総称であって、アルシャク王朝人民を示す Parthia 人とは言語的には近似性はあってもその関係はきわめて曖昧である。Parthia 帝国とハカーマニシュ帝国との間には文化的に何らの連絡も存在しないと云ってよい。Parnoi 族が北方の steppe 地方から東北イラーンに移住して来たのは B.C. 3世紀前半の頃である。この民族はその地方に入って始めてヘレニズム文化の洗礼を受けたが、彼らの国家を形成する社会的基調は土地所有であって、これが Parthia 帝国の封建制度を決定すべき主要な因子となった。ハカーマニシュ王朝の帝国の文化が cosmopolitanism であるのに比して甚しく民族的であるものかかる源由があるからで、この点ハカーマニシュ王朝以前の Media 帝国の文化的基調に近似しており、かかる意味では純粋な Iranism の保持者であったとも云うことが出来る。

ビーストゥーン Bistūn (Behistān) のダーレヨーシュ Dārayavauš (Darius) 1世碑文は Parthava がすでにクールシュ大帝によって占領せられ Naqš i Rostam の碑文はこの王の死の当時の帝国領土の一部になっていたことを報じているが、Parthava の satrap はゴルガーン Gurgān (Hyrcania) をも兼撰していたと見られる節が多い。この地方的な政治態勢はハカーマニシュ王朝滅亡後も残存して居り、かの定住化した Parnoi に対し diadochi の一人である Seleukos のシリア帝国の政治的滲透が及んだのは B.C. 250年頃であった。Parnoi がこの地方を恒久的に占有することに成功したのは精神的には Bactria の Diodotos の独立に刺戟されたものと考えられる一方、Seleukos 王朝が第三次シリア戦争に専念していた間隙に乗じたものであった。故に Parthia 帝国の独立は土着民が自覚的にヘレニズムに対抗して民族国家を建設したと

パルティア帝国の性格

云うような明瞭な意味を蔵したわけではなく、云わば半遊牧民の生存権確立に始まったと見て差支えない。Alexandros の死後から、Parthia 帝国の創立に到るまでの期間においても、この東北イラーンの人民たちの活動は歴史の上に散見せられ、貨幣の鑄造や文字の使用などを行なったが、すべてギリシア文化の垂流であって、そこには人種的乃至民族的自主性は見受けられない。また Strabon がこの国土の野盗と遊牧民とに充ち土地の荒廢を伝えていることから推しても、Seleukos 王朝のこの地方への政治的関心は少なく、統治実績の発展を認めるわけには行かない。云わば完全にして恒久的な統治ではなく、土着民自身の封建的君主乃至半遊牧的人民からなる有機的な社会であり、従ってかかる民族的無自覚性はギリシア文化に対抗するだけの精神的基盤を構成し得なかった。かくの如く、Parthia は少くともその初期の段階においては歴史的な葛藤を何ら経験せず人間的に少しも悪擦れしていない素朴さがあった。しかし、自からの文化力を有しない幼稚な民族が次第に権勢を得た場合、国家資格の整備に必要な政治・経済・技術・文化の諸点に関し当然他の力を導入しこれに依拠するに到るべきことは已むを得ない所であるが、Parthia 帝国の場合においてもその軌を一にするものであった。すなわち、国家と社会組織はイラーン文化から多くの影響を受け、同時にギリシア文化をも受容して国家態勢を形成したわけである。

Parthia 帝国独立の最初の指導者アルシャクは Bactria 人とも云われ、Atrek 河の上流 Asaak すなわち Aršak で王位に即き中国で云う安息王朝の基礎を開いたが、その首都の所在については諸説あって確定することが出来ない。アルシャクの弟ティールダート Tirdāt (Tiridates) は Apaortenon 山の麓に Dara の新市を開いて首都としたらしく、またアルシャクの最初の都は Caspi 海沿岸の Zadrakarta とする説もある。今日の Damghān に近く首都 Hekatompylos の設立を見たのはその後のことである。先にも述べたように王朝はかのアルタクシャシャー 2 世の後裔と自称してイラーンの legitimacy を誇りペルシア風な政治を企図したが、ミスラダート Miθradāt (Mithradates) 2 世の時に到ってハカーマニシュ王朝以来のペルシア皇帝の称号である「王中の王」(Xšāyaθiya xšāyaθiyānām, βασιλεὺς βασιλεων, Bistūn の碑文では ΣΑΤΡΑΠΗΣ ΤΩΝ ΣΑΤΡΑΠΩΝ) を使用し始めた。しかし、これが一見ペルシア皇帝の権威を示すものであっても、アルシャク王朝においては専ら Parthia 人以外の社会人民を威圧慰撫する手段として有効であった。王朝はその社会構造が土地所有者である貴族とそれを耕作する農奴的な土民とから成る古代ペルシア帝国に似ていたことから、国家存立の支柱としてハカーマニシュ王朝の理念を採用することにした。かくて宮廷制度の制定、王の

δαίμων に対する尊敬とともに王を神に準ずる超人的人間と見る考え方など一応確立されるに到ったが、古代ペルシア君主制の本質よりもその形式が専ら準用せられた。それは貴族乃至戦士階級の統制を強化するのにきわめて好都合であったからである。Parthia の王制確立は、王朝の子孫が国力の膨脹に伴い権力を集中化するために、ますます要請せられたが、同時に貴族たちの勢力も並行して増大を見た。例えば、サーサーン王朝時代において帝王の副次的種族長とも見られる Kārin, Sūrēn, Aspāhbadh の各家とともに「Pahlav」の諡を持ってアルシャク王朝の血を引き、また Spandiyādh と Mihrān 両家も同王朝の出と考えられサーサーン王朝の有力な家系として存続していたが、これらの家系はすでに Parthia 帝国時代から王に対する特権の享受者として社会的にも認められ、王とは忠誠を媒介として相連なる封建制下の自治を与えられていた。

ギリシア文化の有力な旗手であった Seleukos 王朝のシリア帝国は、その国土の大部分をアジアに持っていたため、Parthia 帝国出現以前にはすでに半アジア的乃至半イラールの国家に変質していたものの、この王朝の持つギリシア的要素は Parthia 帝国の文化的後進性の上に大きな足跡を遺すものとなった。ペルシア的理念の上にギリシア的風尚が重加された。国家の枢要人物は Makedonia 風に φίλοι (友) の名称を使い、鑄貨には ἐπιφανής (神徳) と θεοπάτωρ (神子) の王の尊称を用いた。宮廷では φίλος (友)、συγγενής (親戚) の称号が用いられ、ヘレニズム愛好は少なくとも Parthia 帝国の支配階級に一般化していた。philhellenos (親好ギリシア) の語は B. C. 140 年頃のミスラダート1世の時に現われているが、この王が勢力を西方に伸張して Mesopotamia の Seleukos 王朝の支配地を制圧し、云わばギリシア系国家と敵対関係にあったにもかかわらず、この philhellenos の語の使用は、政治的争闘とは別にギリシア文化に対する Parthia 人の異常な態度を率直に表明したものと見るべきある。Euripides の劇「Bacchai」がアルメニア王 Artavazd の宮廷において Parthia 王ワロード Warōd (Orodes) 2世の前で演ぜられたのも、それが少なくとも宮廷人に観賞理解せられていたことを前提として考えるならば、Parthia 帝国のギリシア文化に対する風尚と受容の実際をある程度物語るものと考えられる。

Parthia 帝国の歴史の形成が資料的に非常に限られているなかから、同時代の貨幣の研究がその重要な課題の一つであることは人の知るところである。ミスラダート1世時代の tetradrachma 貨と drachma 貨の貨幣の裏面には、Zeus, Nikē, Dēmētēr, Hēraklēs のギリシア系の神や女神の姿が見られ、また王自身の像も Seleukos 王朝風の

バルティア帝国の性格

Zeus の表現を持っている。フラダート Fradāt (Phraates) 2世の発行した貨幣も Seleukos 王朝 Demetrios 1世と2世とのものに模している。西紀1世紀頃のものになるとその君主の像はペルシア風の縮髪の姿であるが、その裏面にはやはりギリシア風の勝利の椰子の葉を差出す Nikē の像をよく見かける。philhellenos の称号はとくにワロード1世時代には常時繰返された。Parthia 帝国の貨幣制度はまったく Seleukos 王朝のをそのまま踏襲し模倣したもので、これは Parthia が Roma と対抗するようになってからも長く存続した。ただ注意すべきは、philhellenos の語は普通の drachma 貨の上には使用せられず、これに反してペルシア風の「βασιλευς βασιλευον」(王中の王)の称号は, tetradrachma 貨の上には用いられないのが原則であった。これらの記銘が両貨に無差別に使用せられたのはワロード2世の頃に到ってである。これは tetradrachma 貨が元来は国際通貨として、また drachma 貨が国内流通用の貨幣目的を持っていたものと考えられているからである。史記大宛伝の安息国の条の「錢如其王面。王死輒更錢，效王面焉。」の記事から推知せられる貨幣上の王の頭の像は、Orient 風なギリシア型とも云わるべきものである。貨幣の記銘も B.C. 1世紀の終り頃になると文字の綴りや形の上に大きな退化の痕が現われてくるが、これはヘレニズム世界の西アジア社会への同化と定着とを象徴するものと云えよう。

ワロード2世が首都を Hekatompylos から Mesopotamia のテーシフォーン Tēsifōn (Ktesiphon) に移したことは、帝国をして名実ともに今やギリシア側に一層緊密ならしめることになった。しかし、この首都造営にあたって Parthia 人は、かつてシリア帝国が首都を Antiocheia に定めた以前の首都であった Tigris 河畔の Seleukeia が隣接の Babylon の住民をここに強制移住させて都市の人力を提供せしめたようなことはせず、Seleukeia の現状に直接触れることなしに新規な都市建設を遂行した。この一事は、Parthia 帝国の為政者の領内におけるギリシア系都市に対する態度を表明するとともに、やはりギリシア文化の尊重を国是とする考えが支えとなっていたことを示すものである。ただ B.C. 210年の北部イラーンの Sirunka のギリシア人虐殺事件があるが、これはアルシク3世が Antiochos 3世に敗れた特殊の場合のことであって、この行為は本来の Parthia 的のものではなく、むしろ例外に属する。Parthia 帝国の Mesopotamia 占拠によって、西方と東方諸地域、すなわちインドや中国に通ずる一切の交通路を支配する結果となり、ヘレニズム世界と地中海世界との経済圏に直接介入し、エジプトとは陸路つづきに交易し得る段階に立到った。それにしてもかつてのシリア帝国がヘレニズム国家であったように自からそれに変化し順応したわけではなく、

Parthia 帝国は本質的には依然として大陸的であり全体としては封建的な土地所有を主調とする国家であったことには変りがない。ただ当時ようやく近東の海辺都市の様態から変化しつつあったギリシア系都市と政治的な関係を持ちそれらに対する新たな政策を経験することによって、ここに Parthia 帝国はかつてのイラーン辺境の一民族国家から国際的の性格を具有するに至ったわけである。Seleukeia と Ktesiphon との関係にも見られるように、ギリシア語が一般語として通用する国際的商業路線上のこの大都市の外側には、一般人民が領主制度の下に集団として存在する首都があった。ただ、商業語としてギリシア語がギリシア系都市に広く通用されていたのに対し、大陸においてはアラム語がむしろその社会に滲透し、文化言語を兼ねて王朝の公用語として採用せられていたことを忘るべきではない。Parthia 人は自国の繁栄と生活方法をを他によって中斷されることを欲せず、またギリシア系都市は φιλαράκης (親好アルシヤク) の語からもわかるように徒らにアルシヤク王朝と事を構えることを望まなかったという並行的意欲は、畢竟、自身の利益を確保するための両者の協力態勢を醸成するようになった。貨幣に見える philhellenos の文字が専ら国内向けの貨幣に印されている理由も、かかる Parthia 国家の現実的性格の一端を示すものに外ならない。この Seleukeia が Parthia 領となった後も長く自己の貨幣を発行し続けていたことも決して不思議ではない。Parthia 帝国がシリア帝国滅亡後、己れの優秀な騎兵と戦略とによって Roma 帝国と争うことに成功し得たのも、一方において実に国内のギリシア系市民の実力の温存と知識の採用とが与って力があったと考えねばならない。Parthia 帝国の両河地方占有後における行政組織の新しい確立に Seleukos 王朝以来の方法を踏襲したことは注目すべきことであるが、これによって国家は古代帝国の satrap 制ではなくしてギリシア風の ἐπαρχία (Roma の provincia に当る) に分割せられ、都市は ἐπιστάτης (行政官) を以て、地方は στροτάγος (知事) を以て行政を行わしめた。また都市相互間の重要な商業路の秩序維持には Seleukos 王朝型の ἀραβάρκης (関税監査官) があった。Parthia 帝国内のギリシア系都市が στροτάγος に対応する自治的な共和的都市として残存し自己の文化の護持と発展とを続けたことは、当然彼らの商業・技術乃至芸術上の特異な優越性と相まって地方地方の社会及び人民の経済生活の維持に必要なものとなったことは云うまでもない。同時に、これは都市市民が Parthia 王に対して何らの敵意を有せず安んじて cosmopolitan 的態度の堅持に終始し得たことを示すものであった。少なくともイラーンと西方 Mesopotamia のギリシア系都市住民は、自己の都市生活の秩序維持のために Parthia 人の間接的な庇護を期待することが出来たわけである。

バルティア帝国の性格

これを概観するのに ペルシア帝国史におけるハカーマニシュ王朝、アルシヤク王朝、サーサーン王朝と続く系譜は、イラーン人の建設した帝国の歴史としての性格を考える時、それらは必ずしも同質的ではない。なかでも Parthia 帝国は、厳密な中央集権的国家ではなく、大地主的貴族を外郭に持ち個々の社会団体 (community) を内包する多元的な国家であった。而して、この多元性はむしろ Seleukos 王朝から継承した遺産であり、これはハカーマニシュ王朝以来のイラーンの統治理念とは程遠いものであった。かの Pahlavī 語書 Kārnāmak i Artaxšēr i Pāpakān や Šāhnāmāh において Parthia の部分が排除され脱落しているのはかかる意味においてその主旨が首肯せられる。しかし、この Parthia 国家の多元性と云えどもそれが全国土に均質的であったわけではない。この王朝の興起した北方地方は王と貴族たちの支配した封建制の中心をなし、パールスも従属的王国に過ぎなかった。これに対して Mesopotamia はギリシア系都市の集合地帯であり、そこには多少の程度の差こそあれ自治制が行われていた。Parthia 帝国が無文明社会から興起し武力によって捷ち得た政治力を以てヘレニズム世界のむしろ擁護者となって臨むに到ったことは、西アジアのギリシア系都市をして長くその活動力と生命とを存続することを得させた。Parthia 帝国の支配期においてかかる都市の破壊とか圧迫とかを見なかったことは銘記すべきことで、これは東洋の征服王朝にとってはむしろ異例に近い。しかもかかる寛容性は相当程度の地方的自治を許可し、かつ家臣の忠節を保持するのに何らの支障とならなかった。かくすることによって土俗的な文化単位に細分化せられた諸地域が国家と結びつく国家構造は Seleukos 王朝以来の合理性を含むものであるが、これが Parthia 帝国にとってやがてその弱点を曝らけ出す源となったことも否み得ない。Parthia 人が Iranism の良心的擁護者であったか否かは、少くとも帝国の初期においては文献的な証拠を見出すのに苦しむが、帝国の文化の本質とするものは地中海諸国家に見られるような都市の cosmopolitanism ではない。点的ギリシア的都市の周辺を取りまくイラーン人民が依然として Iranism の黙々たる護持者であったことは疑いない。この伝統の反動的止揚は西紀3世紀のサーサーン王朝によって脚光を浴びるものとなった。Parthia 帝国における Iranism を支持する諸宗教についても我々は決定的知識の表明を憚るが、Parthia 人が屍体を土中に埋め生費を行っていた記事を見る時、彼らがイラーン宗教の正統的なマジ教徒乃至ゾロアスター教徒でもなかったことが推知せられる。また、この時代に Anahita 女神崇拜の興隆と Mithra 教の流布とが明らかなことは、Parthia の人民の精神生活の実際を研究する上の有力な視点と云わねばならない。今日のイラーンにかの女神を示す

duhtar の語を附した地名が見られることからしても、Anāhita 信仰は国土の相当の範囲にわたって行われていたことが判る。Kangāwar のこの女神の殿堂の巨大な遺跡を見ればさらに思い半ばに過ぎるものがあるろう。この女神崇拜が小アジアやアルメニア地方にわたってひろく流布していたことは今やかくれもない事実であり、しかもそれは次のサーサーン王朝初期の帝王とも密に結びついていたもので、シャーフブフル Šāhpuhr 1世のカアバ・イエ・ゼルドシュト Ka'bah i Zardušt 碑文に端的に明示されている。大王の娘にしてかつその王妃 (bānbušnān bānbušn) でもあった人物は Ātar Anāhīt ('trw 'nhytyh) と云っていた。またアルシャク王朝時代のミスラ信仰も随所に指摘される。θεοφόρος 的名称に Mithra の神名をつけている王名は B. C. 160年頃まではあらわれていないにしても、その後に至ってこれを見るようになったのは当時の Mithra 信仰の隆盛を知る上の一つの鍵ともなる。この点で無視出来ないものはクシャーン王朝の斯神崇拜である。バクトリアのスルク・コタル Surkh Kotal 聖所で発掘されたいわゆるカニシカ王碑文なるものはこれを余ますところなく物語るもので、しかもその背景は何かと云えばハカーマニシュ王朝時代からセレウコス王朝時代を通じて流れ来たった Mithra 神崇拜の潮流である。ダーレヨーシュ 1世が他の王位継承予定者らと共に騎乗して東面した時、感応してその乗馬が最初に嘶き、これによって 1世が大王位継承者と決定した話はヘロドトスの伝えるところであるが、これが Mithra の影臨に基づいて起こったことは疑う余地がない。また上に述べたアレクサンドロス譚では Alexandros 大王は没後 Mithra 神として崇められ、ペルシア人はその遺骸を自国に將來せんことを求めたとある。今、このカニシカ王碑文に接するとこれとほぼ同様のことがうかがわれる。碑文は王が最高祭司として Mithra 神を崇める祭儀をかこの聖所で執行したことをまず謳っているが、ついで王の没後、王とミスラがその聖所に安置される際の儀礼に言及し、最後には“Mithra の子” (μυρο-νομο < *Miθrāpuθra-, cf. 天子) なる王への種々な呼び掛けをつらね、その末尾を ΔΕΙΟΟ α μυρα-μυνο ΜΙΘΡΑ (i. e. *Daiva ā Miθrāmanō Miθra) “神よ、おお Mithra の心を具したもう御身よ、Mithra よ” なる句で結んでいる。文脈から察すると安置されたものは王の像とミスラ神のそれというように各異に解するよりも Mithra 神として神化されたカニシカ王の像と解する方がよいが、いずれにしても Mithra 神崇拜の盛行を物語るものであることには変りがなく、これを広く見ればアルシャク王朝期のイラーン及びその周辺における斯神崇拜の流布を示唆するものである。しかもまた一方では、Bakhtiārī の山中で発見せられた西紀 1 世紀の浮彫が示すように、Parthia 人が maguš 主宰の祭典に参加していたことも

パルティア帝国の性格

疑うことができない。よってこれらを総合すれば、パルティア帝国には、一種の混合主義的信仰が行われていたことが知られ、しかもそれはハカーマニシュ王朝時代からの Iranism 的世襲財であった。さきに一言したように、サーサーン朝時代に至ってこれが反動的止揚をみるのであるが、しかしその止揚は即時に成功したものではなかった。その事情は Dēnkart 書の諸所を見るまでもなく、周知のように Sāhpuhr 1 世が Mānī に宣教の自由を許与した一事によるも明瞭である。その Mānī は maguš 祭司 Kartīr によって排撃されているのである。このように根強い混合主義的信仰に願れば、Parthia 帝国の列王中に散見せられるミスラダート、アルタバーン、ティールダート等の名称は、彼らとその鑄貨にギリシア系の神名を印している意味とは別に、Iranism 自体における多面性を率直に示すものと云うべきである。これはむしろ地方的性格を基底とするものであって、やがて正統的なマズダ教の中に包摂せられる運命を持つものであるが、アルシャク王朝のかかる地方的適応は Parthia 帝国の一切の問題に通用する一貫した性格であった。

(筆者は京都大学文学部教授・本会会長)